

2020年度懸賞論文(学生論文) 受賞論文の概要および受賞者のコメント

一般社団法人 建設コンサルタンツ協会広報事業専門委員会

2020年度の学生論文は、「あなたが市長なら、どのような“まちづくり”をしたいですか?」および「新たな土木技術で、あなたの身近な地域の防災力をアップデートせよ」の2テーマで、昨年6月1日から4ヶ月間(締め切り9月30日)募集を行いました。その結果、15編の応募をいただき、厳正な審査の末、優秀賞1編、特別賞3編を選定いたしました。各賞の受賞者の皆様よりコメントをいただきましたので、ご紹介いたします。

優秀賞

「宝塚市におけるバーチャル二地域居住モデル構想」

芝田 涼希 氏
(大阪市立大学)

■論文概要

- ・ポストコロナにおけるまちづくりとして、都市部と地方部に生活拠点を構える二地域居住を参考に、宝塚市内の南部市街地と北部地域をそれぞれ都市部と地方部とみなした「バーチャル二地域居住モデル」を提案している。
- ・都市住民の導入利点として、「住む場所＝第一の場所」はそのままに、「働く場所＝第二の場所」、「快適に楽しめる場所＝第三の場所」が地方部で得られるなど、テレワークの普及に伴う新たな働き方に応じた空間機能の再配置を示している。
- ・さらに、二地域往来のための公共交通体系にも言及しつつ、それぞれの場所を利用した具体的な市民のロールモデルを複数提示している。



【受賞者コメント】

今こそ都市の在り方を見直さなければならない、という思いの背景には、本文でも述べた新型コロナ禍に加えて、もう一つのトピックがありました。それは、昨年11月に行われた、大阪府域における政令市廃止・特別区設置に係る住民投票です。

2020年は、都市とは何か、今後どうあるべきなのか、問われた1年でした。その答えを我々市民一人ひとりが自ら描いていく試みこそが、国家と民主主義の根幹をなすのだらうと思います。

特別賞

「いの町における伝統技術継承問題から考える地域再興計画」

辰巳 詞音 氏
(島根大学大学院)

■論文概要

- ・高知県吾川郡いの町を題材に、伝統技術継承問題の解決と地域再建を可能にするためのプロセスの構築について提案している。
- ・後継者不足や高齢化により衰退しつつある伝統文化を生業として自立させるために、敷地計画や段階的な山の間伐と原料の栽培環境、作業施設の建築、設備のデザインおよび機能的な側面からの体験型施設の建設について検討している。
- ・持続可能なまちづくりを実現可能なものとするために、伝統技術の担い手、住民や観光客、財源の獲得に加え、資源・コストの効率化についても言及している。



【受賞者コメント】

いの町に訪れたのは一年半前です。透き通った水、緑豊かな木々、人と自然が共存していた時代から自然だけが取り残されているのを感じました。

目覚ましい発展を遂げる昨今、手漉きの伝統が盛り返すことは難しいかもしれません。しかし、継承問題を抱える伝統文化は全国に存在します。今回の受賞を機に、地域の伝統文化に少しでも想いを巡らせる時間が生まれれば幸いです。私は、手漉きの文化が生き続けてくれることを願っています。

「防災情報としての公的営造物トレーサビリティの確保と活用」

芝田 涼希 氏
(大阪市立大学)

■論文概要

- ・過去に提案されている「公的営造物トレーサビリティシステム」の概念を応用し、災害対策として整備された土木構造物等について、実空間やWEB空間の情報を容易かつ即座に入手できる「防災営造物トレーサビリティシステム」を提案している。
- ・土木施設の整備効果や費用の情報によるアカウントビリティの確保、合意形成・住民参画への理解促進など、防災情報だけでなく、さまざまな情報のオープン化による効果とその重要性を指摘している。
- ・QRコード、ARコンテンツ付きの表示板の付設(オンサイトの情報提供)や、WebGISのハザードマップ上への対象営造物に関連する技術、法令、歴史背景等も含めたプロット(オフサイトの情報提供)、さらには営造物のライブカメラやセンサ、住民からの投稿によるリアルタイムな情報の取得についても述べ、市民の土木施設に対するニーズへの情報のオープン化についても検討している。



【受賞者コメント】

新型コロナ禍に伴う「巣ごもり需要」の一つにDIYがあります。昨年発売され、社会現象にもなったゲーム「あつ森」も、ゲームの世界でDIYを楽しめることが特徴です。

DIYの由来は、「自分達の手で我が町を再建しよう」というロンドン市民の戦災復興運動でした。社会資本整備への住民参画とは、まさにDIYそのものではないでしょうか。老若男女がこのDIYを楽しむことができる社会を実現するためには、土木情報のオープン化が欠かせません。

「少子高齢化時代における多色的なまちづくり」

三宅 真優加 氏、日野田 圭祐 氏

(香川大学)

■論文概要

- ・香川県が抱える人口問題や災害が頻発する現状に対して、住民が安全・安心な生活を送るために、地域の特徴や財産を活かしながら、複数の異なるタイプの多様なインフラを組み合わせる問題点を解決する「多色的なまちづくり」を提案している。
- ・多様なインフラを5色に色分けした上で、それぞれの持つ問題点に対して地域の特徴を踏まえて、これからのまちづくりを検討している。
- ・地域特性である「ため池」の活用や、堤防整備から産業創出、観光振興などの複数の視点から解決策を示すことで、単一の事業にとどまらず、複合的なまちづくりの提案による地域の持続性の向上に言及している。

【受賞者コメント】



この度は、このような賞を頂き誠にありがとうございます。二人で意見がぶつかってしまうこともありましたが、議論を重ねていくことで自分たちらしい考えをまとめることができました。またこの論文作成をきっかけに、香川県の特色と課題を知ることができたため、今後の香川県の持続的な発展に尽力できるようさらに学んでいきたいと思えます。

最後に、この場を借りて今回あたたかく見守ってくださった教授に感謝申し上げます。

なお、入賞論文は、建設コンサルタンツ協会ホームページの「論文募集コーナー」の「入賞論文一覧」に掲載されています。<https://www.jcca.or.jp/achievement/article/award.html>

また、入賞論文の論文講評は会誌 VOL291内「懸賞論文(学生論文) 審査結果の報告」に掲載されています。